

東チベットの古道調査 その1 香格里拉から徳欽までの茶馬古道

小林尚礼

小林写真事務所

調査の目的

中国雲南省北部からチベット自治区東部、四川省西部にかけての山岳地帯（ヒマラヤ山脈東部と横断山脈）は、モンスーンの影響を受けて降水量が多く、山脈を隔てる峡谷の斜面には森林が発達している。森林には多様な動植物が生息し、人々は山や森林の恵みとともに暮らしている。樹林限界の下部まで達する氷河も多く、その自然景観は世界的にも特異である。本調査では、この地域を「東チベット」と呼ぶ。

東チベットは様々な分野の研究対象として興味深い、いくつかの理由によって、研究・調査の空白地帯となってきた。理由の1つは中国の政治的な問題である。しかし、近年の経済発展に伴って、この地域が徐々に開かれるようになってきた。

もう1つの理由は地形の険しさである。山岳と峡谷が連続する地形の険しさは他に類を見ず、そのため広大な東チベットに車道はわずかしかなかった。だが、現地の人々が利用してきた山道は多く、その一部は今も使われて、山道の周囲には伝統的な生活を営む人々が居住している。東チベットの人と自然の本来の姿は、車道沿いではなく、昔から利用されてきた古道沿いにこそ見られるのだ。そして現在その姿は、近代化やグローバリゼーションによって、徐々に変化している。このような山道のうち主要な道は、中国からチベットへ茶を運んだ道として「茶馬古道」と呼ばれる。本調査全体では、筆者の登山経験を生かして東チベットの古道を足で歩き、古道の実態と、古道の周囲に展開する人と自然の現状を写真と文章で記録して、医学研究の基礎資料に供することを目的とする。

本稿では「調査その1」として、雲南省の香格里拉（シャングリラ）から徳欽まで踏査してえた見聞を記す。

茶馬古道とは

中国南西部に存在する茶馬古道は、別名をティーロード、またはもう1つのシルクロードと呼ばれる。千年以上前から存在したとされる交易の道だ。取引されたのは、雲南周辺の茶とチベットの馬。商人たちは茶をラバに積み、キャラバンを組んで旅した。

そのルートは、茶の原産地である雲南の西双版纳（シブソンパンナ）や四川の雅安などから、横断山脈を通過して、チベットのラサへと数千キロに渡って続く。この道を通ってインドやヨーロッパの品物が中国に入ることも多かった。

茶馬古道の原形は、一三〇〇年ほど前の唐代に生じたといわれる。唐の皇女・文成公主が吐蕃の王に嫁いだのち、チベットに茶を飲む習慣が根づいたという。それ以後チベットでは、自国で栽培できない茶を輸入するようになった。宗代には、茶の需要が高まったチベットと良質の軍馬を必要とする中国のあいだで安定した交易が行われるようになった¹⁾。

チベット人は初め茶だけを飲んでいただけだが、やがてバター茶を飲むようになる。バター茶とは、煮だした磚茶にバターと牛乳を溶かした飲み物だが、チベットの乾燥した厳しい風土には欠かせないものだ。

明代には、チベットから薬草や毛皮などが運ばれるようになり、中国からは茶のほかに砂糖や銅器なども上がった。日中戦争時代には、茶馬古道を通じてインドから中国へ軍事物資が輸送されることもあった。一九五九年のチベット解放前後に再び特需に沸くが、その後古道に平行した車道が建設されて、茶馬古道はその長い役目を終えていった。

茶馬古道の現地調査を行うと、その途上で、茶の交易に関わったという多くの老人に出会う。中華人民共和国成立以前の交易に携わった人は既に

八〇歳以上だが、未だ存命している。

二〇〇七年五月、雲南南部から梅里雪山まで茶馬古道を踏査した。このうち、標高三〇〇〇メートルを超える香格里拉以北の記録を、老人の聞き取りを中心にして調査地ごとに記す。

香格里拉 (3300m)

雲南の茶馬古道は、茶の産地である西双版纳や普洱に始まり、茶の集積地である大理や麗江をへて、茶の消費地であるチベット文化圏へと続く²⁾。雲南のチベット文化圏は、香格里拉（シャングリラ、ジドン）から始まる。ここは、チベット人が暮らす標高三三〇〇メートルの高地。一年の半分は平均気温が十度以下になり、平地に高山植物が咲き、畑では高地に適した六条裸大麦が栽培される。

香格里拉の旧市街には、茶馬古道の時代と変わらない石畳の道が一部残る（写真1）。その一角に住む老人を訪ねて、馬帮（マーパン、馬のキャラバン）の仕事について尋ねた。以下に要点を記す。

○ジャン・ワンシヨ（男、1937生、藏族）

- ・ 17歳から赶馬（馬方）の仕事 시작했다。ラサへは2回行った。シガツェまで行ったことある。
- ・ まず旧暦3月頃、大理～思茅へ茶葉を仕入れに行く。往復に1ヶ月以上かかる。
- ・ 馬を（香格里拉郊外の）ナパ海あたりの草原で1ヶ月間草を食べさせて休ませる。
- ・ その間、仕入れた茶葉は、松賛林（スンツェリン）寺の僧坊に保管する。
- ・ 旧暦4月頃、チベットへ向けて出発。3ヶ月かけてラサまで行く。ラサで1ヶ月間休んで、11月頃香格里拉へ戻る。
- ・ 仕入れのときは茶葉を竹の籠に入れて運ぶが、チベットへ向かうときは木の皮の箱に入れ替えて、牛皮のベルトで巻いた。
- ・ 1家の馬は80頭くらい。山賊から身を守るため、3家一緒に行く。全員、ライフルと刀を携えた。馬鍋頭（キャラバンのリーダー）はピストルを持っていた。
- ・ 番犬として、小さい犬を連れてゆく。歩けなくなったら馬に乗せる。
- ・ 歩く順番は、くじで決める。先頭と最後尾は危険。

- ・ 出発日は占いで決める。
- ・ 道中恐かったのは、山賊と洪水。
- ・ 山賊は大人数で来ることが多かった。そんなときは威嚇射撃した。シュラ峠やポムダ辺りが多かった。
- ・ 洪水で馬が死ぬことも多かった。1～2頭死ぬことは何でもなかった。
- ・ もし人が死んでも、見舞い品くらいしか渡さなかった。馬帮の中には、親戚や知人が多かった。
- ・ メコンにはロープブリッジが架かっていた。人や馬が落ちて死ぬことあった。
- ・ 苦しかったのは、馬の荷物を1日5回上げ下げすること、冬の寒さ。
- ・ 雪が降り始めたら、峠で閉ざされないように、夜も寝ずに歩く。峠の上りはラッセルする。下りは荷を下ろして引いた。
- ・ チベットから持ち帰ったのは、シルク、マオニー（布）、象牙、指輪、腕輪、染料、藏紅花など。
- ・ 自分は僧侶だった。馬帮に入ったのは、聖地ラサへ行くため。ラサに着いて、体をきれいに洗って、新しい服を着て、寺に参拝するのが何より嬉しかった。

二時間以上話を聞いたあと、昼飯をご馳走になる。出してくれたのは、ツァンパとダンプ、そしてバター茶。この三種はチベット人の伝統的な食事である。ツァンパとは裸大麦の麦焦がしで、香ばしいキナコのようなもの。ダンプとは、バターをとったあとのヤク乳を熱してできる固形物。無脂肪のタンパク質の塊で、酸味のあるさっぱりとした味だ。

バター茶は、茶というよりは塩味のバタースープのようなものだ。茶の味はあまりしない。チベット人は食事のたびに何杯も飲むが、慣れないと油分が多いので胃にもたれる。近づくだけで、ヤクのバターの濃厚な匂いがする。バターのコクが強く、重たい飲み物だが、飲むと体の心から温まり、力が湧いてくる。チベット語では、チャーという。

作り方は次の通り。

（材料）磚茶、ヤクバター、塩、ヤク乳

（道具）ソンラ（木筒）、土鍋、茶こし

- 1 土鍋で磚茶を煮だす
- 2 ソンラに、バターと塩少々、ミルクを入れてから、茶こしを使って茶を注ぐ
- 3 ソンラの攪拌棒を激しく上下させて、茶とバ

ターをしっかり混ぜ合わせる

4 でき上がったバター茶を、ポットに移す

5 ポットからお椀に注ぐ

近くに住む女性は次のように教えてくれた。

○ジョマ (女、72歳、藏族)

・バター茶には普洱茶の生茶を使う。生茶は涼、バターは熱、合わせると温になる。熟茶は温。

普洱茶とは、雲南南部で作られる磚茶の1種だ。

チベット人は、自らの土地でとれないお茶をなぜ日常的に飲むのか。一般には茶のビタミンCをとるためと言われるが、茶を煮だす過程でビタミンCは壊れやすい。黒茶にビタミンCは含まれないとの分析結果もある。一方、茶に含まれるカフェインが、高地の暮らしに必要なのではとの説がある³⁾。また、お湯にバターを乳化させるには、茶の一分が必要らしい。チベット人がバター茶を飲み始めた理由は、実はよくわかっていない。今後調べる必要がある。

茶葉を保管したという松賛林寺を見にゆく。香格里拉の北の小高い丘にいくつもの伽藍が建ち、その周囲を百近い僧坊が囲んでいる。一六八〇年にダライ・ラマ五世が創建した、雲南最大のチベット仏教僧院である。

今の車道は僧院の数キロ西を通っているが、茶馬古道は車道とは違うところを通っていたという。その道を歩きたい。僧坊の修復をしていた男に案内を頼むと、引き受けてくれた。この先のネーリ村出身だという。

○アーオン・ピツ (男、52歳、藏族、農業、5人暮らし)

・小さい頃、馬帮を見た。

・松賛林寺を出たところの村は、小さな商店街になっていた。塩や茶葉を売っていた。

・香格里拉からナパ海の道は、今の車道沿いの道と、松賛林寺からネーリ村に至る道の2条あった。松賛林寺からの道のほうが馬帮が多かった。

松賛林寺を出発し、僧院西端のチョルテン (仏塔) を過ぎると、道は車が通れるほどの砂利道になった。その両側には家が立ち並んでいる。そこが商店街だったという。

家を過ぎると、両側に麦畑が広がる風景になる。道端に小石を高く積んだ塚がいくつも並ぶ。ネーリ村の人々が、一軒で一つ作るそう。松賛林寺が少しずつ小さくなっていった (写真2)。

尼西 (3000m)、幸福 (2200m)、上橋頭 (2100m)

翌日、香格里拉を車で出発して三〇分ほど行くと、松の疎林が続くあたりで、尼西と呼ばれる村の上部を通過した。良質の土がとれるため、茶を沸かす壺や土鍋の生産が昔から有名だ。古道は、村のすぐ横を通っている。

香格里拉の高原から金沙江へ下る途中で、道端の売店によった。尼西郷のレチュエイという村だ。その店の主人が、近くの古道を知っているというので案内してもらおう。

○ペマ (南永紅) (男、1958生、藏族、農業+雑貨屋経営)

小屋の裏の急坂を登り始めた。通る人がいないので、すっかり荒れている。二十分ほど上ると、建物の廢墟があった (写真3)。土壁の厚さは30cm以上で、銃口もある。道の見張り番が住んでいた家だ。村を襲う盗賊がいたようだ。

言い伝えでは、見張り番の男は殺生を恐れず、村の聖山にすむ動物を撃ってしまったので、この家は途絶えたそう。

金沙江の標高とほぼ同じまで下りきったあたりに、幸福と呼ばれる村がある。ここは、バター茶用の木のお椀作りが有名だ。雲南からチベットへ出かける馬帮は、茶の他にこの村で作られたお椀を運んで売ることが多かった。

その後、金沙江の本流へ下るために、車道は岩壁を削って支流を忠実にたどるが、古道は支流と本流の間の支尾根を越えていたという。その道を見るために、上橋頭村へよった。

村は金沙江の支流に面していて、対岸の斜面につづら折の小道が見えた。支尾根の鞍部を目ざして上ってゆく。それが茶馬古道だ。

川には吊橋がかかっている (写真4)。近年の馬帮はこの橋を渡ったという。橋の名前は「紅軍橋」。毛沢東率いる中国共産党が長征を行う過程で、紅軍第二軍と第六軍が、金沙江のこのあたりを通過している。そのなかの一部隊がこの橋を渡ったらしい。売店のペマさんによると、紅軍の一派は、このあたりの村にしばらく潜伏したようだ。紅軍は金沙江を船で渡ったが、後に共産党は長征を記念して、奔子欄の下流に立派な橋をかけた。

車道とは異なる場所に残る茶馬古道（香格里拉～徳欽）



写真1 香格里拉の旧市街に残る石畳の道



写真2 松贊林寺からネーリ村へ至る古道



写真3 尼西郷付近の古道。見張り用の建物の廃墟が残る



写真4 上橋頭村の紅軍橋。古道は左奥の稜線に続く



写真5 奔子欄の渡し場（金沙江）



写真6 ウヌティン村から徳欽へ続く古道。左奥は徳欽



写真7 徳欽から阿東へ続く古道。道の左には関所跡



写真8 梅里水村付近の古道。左には瀾滄江



図1 茶馬古道のルート

奔子欄 (2050m)

金沙江のほとりにあるチベット人の町・奔子欄へいたる。香格里拉と徳钦を結ぶ道のほぼ中間にあたり、金沙江の渡し場と宿場町として知られる。標高は二〇五〇メートルと低く暖かいが、こんな低地にもチベット文化は適応している。

村の二人の老人を訪ねた。一人目の男に渡し場の跡を案内してもらった。

- 除農布 (男、68歳、白族+藏族、農業)
- ・昔は、河の水位が今より高かった。
- ・船着き場の上に、漕ぎ手の家が6軒あった。
- ・昔の船着き場は、今の場所より少し上流。

・自分にはペー族の血が入っているが、生活スタイルや言葉はほぼチベット式。宿場町・奔子欄には異民族が多い。この地に居つき、何代もかけてチベット化していった。

村のすぐ下が金沙江の川岸だ。この川は以前砂金が採れたので「金沙」と言われるが、今はもう採れない。対岸にはワカと呼ばれる村がある。対岸の小さな砂浜のあたりが昔の船着き場だというのが、そこにはもう何も残っていなかった。その十メートルほど下流には、チョルテン（仏塔）が建っている。

現在の船着場は数十メートル下流に移り、金属製のボートが三艘係留されていた（写真5）。

昔の船はどんな形をしていたのか。もう一人の老人の家を訪ねた。

○ペマツリン（男、1937生、蔵族、元教師）

・父は、18～63歳の間、赶馬（馬方）をした。自分も馬帮を見たことある。

・奔子欄には6～7人の馬鍋頭（馬帮のリーダー）がいた。

・馬帮用の船は大きかった。長辺16～17m、短辺7～8mの二等辺三角形。丸太と木の板で造られていた。

・船を運ぶのに300人の人夫が必要だった。

・18人の漕ぎ手と、船頭が乗り込んだ。馬は17～20頭乗れた。

・船は1艘しかなく、往復するのに2～3時間かかった。

・船頭の役目はお祈りだった。船から青稞麦をまいた。

・事故を2回見たことある。1回目は、漕ぎ着いた場所が悪くて岩にぶつかり船が壊れた。十数人死んで、2人生き残った。2回目は、馬鍋頭が言うことを聞かず、積載量が多すぎた。浸水して沈んだ。人は20人乗っていて6人生き残った。父も乗っていたが生き残った。馬は20頭中1頭生き残った。馬鍋頭は金の入った荷に執着して溺れた。

東竹林寺(3000m)、ウヌティン(3400m)

奔子欄から徳欽へいたる道のりは、チベットへ向かう馬帮にとって最初の関門だ。標高四千三百メートルの白馬雪山峠を越えなければならない。馬帮は野宿を重ねながら、四日かけてこの峠を越

えた。

峠まで三分の一ほど上ったところに、二つの寺がある。一つは東竹林（トントップリン）寺、十七世紀後半に建てられたチベット仏教ゲルク派の僧院だ。大きなお堂を数十の僧坊がとり巻く立派な僧院である。

東竹林寺と対をなすようにして小さな尼寺がある。山中にひっそりと存在する尼寺を訪ねた。一つのお堂があり、そこに寄り添うように五～六棟の僧坊がある。尼さんは百三十人いるというが、男性の寺と違い静かな感じがする。お堂をのぞくと、まだ十代の少女たちが口々にお経を唱えていた。もちろん頭は丸刈りである。厳かな雰囲気だった。

標高四千メートルを越えると、傾斜は徐々に緩くなり、やがて唐松と石楠花に覆われる浅い谷となる。雪を頂いた白馬雪山（標高五六四〇メートル）を眺めながら、浅い谷底を延々と進む。標高四二八二メートルのラバラ峠に馬帮が達するのは、奔子欄をでてから三日目が四日目のことだろう。峠から石楠花の海に入り、一気に高度を下げてゆく。

ある程度高度を下げると、車道は山腹をまきながら高度を変えずに進むようになるが、古道は尾根を乗り越えて最短距離になるようについていたようだ。その一つの道を歩いてみた。

ウヌティンという村の上部から、車道を離れ山に入る。よく踏まれた土の小道を十分ほど登ると、ジェム・ラと呼ばれる小さな峠にでた。峠を越えて前方を見下ろしたとき驚いた。まだ遠いと思っていた徳欽の町が、眼下に突然見えたのだ。山のなかから見る徳欽は、車道から見るよりも大きく見えた（写真6）。

徳欽(3300m)

徳欽（ジュイ）は、標高三三〇〇メートルのチベット人の町である。昔から交通の要衝で、ここから香格里拉とラサへ続くほか、瀾滄江下流の維西や、金沙江上流の巴塘へも続く。かつては阿墩子とも呼ばれた。

この一帯は、雪山のあいだを深い峡谷がえぐる大峡谷地帯で、標高によって気候と植生が大きく異なる。

徳欽周辺には、一世紀前から様々な外国人が出

入りしていた。キリスト教の宣教師や、F. Kingdon Wardを始めとするプラントハンター、Joseph F. Rockなどの探検家、そして麝香などを扱うヨーロッパ商人だ。彼らもまた茶馬古道を歩いた。

二十世紀初めの徳欽には馬店（馬帮用の宿）が六軒あり、馬鍋頭は七～八人いたという。そのうちの一つ、余家店という馬店を訪ねた。既に営業をやめて建物は改築されていたが、同じ場所に子孫が住んでいた。彼に話を聞いた。

○チースー（余志成）（男、1933生、藏族）

・ 代々、馬店（余家店）を営んできた。自分は6代目。

・ 10人泊まれる部屋が、10部屋あった。20頭くらいの馬も中に入れた。

・ 入りきらない馬は、下流の畑内（今の新市街）で泊まった。

・ 畑の土地は、1957年頃に国に没収された。

・ 徳欽には、馬店が6軒あり、馬鍋頭は7～8人いた。

・ 1955年頃、チベットから来た商品は、税金を避けるため梅里水村に置いた。徳欽からこっそり取りに行った。

・ 父は、赶馬を手伝いながら、巡礼のためにラサへ行った。

・ 徳欽の馬帮は、麗江や大理へ出かけることが多かった。

・ チベット、青海から来る馬帮は多くなかった。巡礼のために来て、小さな商売をする人はいた。

徳欽の住人の八割はチベット人だが、わずかに回族も住んでいる。回族とは、中国内でイスラム教を信仰する少数民族だ。彼らは元の時代に、フビライ・ハンとともに雲南へやってきたと言われるが、茶馬古道とも深い関係を持っている。

回族は商才に長けていて、かつ人の嫌がる仕事もやるという。そのため、馬鍋頭にまでのし上がる人が少なくなかったようだ。また、馬帮に参加して、怪我や結婚などの理由で一つの場所にとどまり、そこに回族の村を作った人もいたという。茶馬古道の周辺に、回族の村が多いのはそのような理由らしい。

徳欽のモスクには、冬虫夏草を扱う回族が集まっていた。付近の農民から買い上げた冬虫夏草を量りながら商売の話をしていたが、日に六度の祈りの時間が来ると、仕事をやめてモスクのなか

に入っていた。

徳欽～阿東(2700m)

徳欽から北へ向かう茶馬古道を、阿東村までたどることにする。現在の車道はいったん南西に大きく迂回するが、古道は徳欽の北の峠を越えて、北西にまっすぐ進む。この徒歩の旅は、徳欽の友人ルゴンと二人で行くことにした。

八時四十五分歩き始める。旧市街を山の方向に向かい、そのまま山の小道へ入ってゆく。途中で阿東村から来た若者三人とすれ違った。徳欽へ冬虫夏草を売りに行くという。

十時、標高三千六百メートルのジュ・ラ峠に着。思ったよりも近かった。峠には祈りの旗がはためき、経文の書かれたマニ石積み上げられている。周囲は高山の風景だ。

下りは谷沿いの道となる。谷は時折開けて草原となり、そこにヤクや馬が放牧される。両側の山肌に、多くの岩壁が見られた。驚いたことに、そのほとんどに経文が掘られ、仏画が描かれている。マニ石を積んだ石塚も現れる。何かに祈りをささげているようだった。

この道は、梅里雪山（カワカブ）の巡礼路の一つである。梅里雪山とは徳欽にそびえる聖山で、チベット仏教徒の信仰の中心だ。古くからチベット人はこの道を歩いて、来世の幸せを祈ってきた⁴⁾。茶馬古道はそんな巡礼路と重なる。

一時半、標高三三〇〇メートルのジャダ・ゾンと呼ばれる放牧地につく。そこで、尾根の末端が屏風のような形をした岩壁を見つけた。その岩にも多くの経文が掘られている。「この岩だ」、と思った。

明治時代、仏典を求めてチベット入りを試みた能海寛という日本人がいた。三十四歳の彼は一九〇一年に雲南で行方不明になるが、実はこの谷で命を落としたのではないかという説がある。その死後、能海を弔うためにある日本人がこの谷まで来て、屏風のような岩に、「大日本能海寛師遭難地」と刻んだという⁵⁾。その文字を探した。

岩の表面を覆うトゲの灌木を払うことから始める。念入りに岩を調べるとそれらしい跡が見つかったが、文字を確認することはできなかった。文字が刻まれたのは一九二二年のことである。これまでの八十五年の歳月は長すぎたと考えるしか

なかった。

その後、ジャダ・ゾンで放牧をしていた男に声をかけて、テントにお邪魔する。男は、テントで寝泊りしてバターやチーズを作っていた。バター茶と作りたてのダンプ（無脂肪チーズ）を頂いた。放牧地で頂く乳製品の味は格別だ。

四時に出発。谷を下るにつれて左右の岩壁が高くなり、威圧的な峡谷となる。

六時、標高二千九百メートルのチャポワと呼ばれる場所に到着。そのすぐ下流には、チベットの関所跡が残っていた(写真7)。能海が生きた時代、チベットは外国人の入国を認めていなかった。馬帮など地元の間人はこの関所を通過できたが、怪しい人間はすぐに殺されたという。関所の周囲には、その時代に殺された人の骨がいくつも埋まっているという。

チャポワで放牧をしていた男が、自分の岩小屋に招いてくれた。彼は、小屋の近くの地面を指しながら話してくれた。

○ニマ（男、1958 生、藏族、農業）

・1984年頃、村の老人がマニ石を探すため土を掘っていたところ、人骨を見つけた。場所はかつての関所の近く。恐ろしいので、その後掘り返した人はいない。

・自分の岩小屋の右端に経文が掘られている。小さい頃、そこに縦書きの漢字があった。その部分の岩は、いつか崩れてしまった。

能海追悼の十文字とダブるが、確認のしようがない。ニマに礼を言って先を急いだ。

七時半、阿東村に到着。村に一軒だけある民宿に泊まった。宿の主人が温かく迎えてくれる。能海寛の話をする、彼はこう言った。

○スナドゥジ（男、46 歳、藏族、農業・雑貨屋経営）

・80年以上前、天主教徒（カトリック）1人、チベット仏教徒1人、日本人1人が阿東へ来たことある。彼らは、徳欽から来て、阿東を通過してチベットの方へ行った。しかし、日本人が病気になり引き返してきた。日本人はその後亡くなった。

この日本人が能海と関係があるか不明だが、興味深い話である。

翌朝、宿の売店にやってきたお婆さんに、昔の話を聞いた。若いころ馬帮をよく見たという。

○ツリツ（女、1921 生、藏族、農業）

・馬帮が村に来ると、馬用の草を売りに行った。木椀と交換すること多かった。銀貨・銅貨とも交換した。お土産（茶葉、肉、米、布など）をくれることもあった。馬帮たちと一緒に踊ることもあった。馬帮がくると嬉しかった。

・阿東に馬店はなかったが、馬帮がよく泊まる家が2軒あった。

・北から来る馬帮は、塩を持ってきた。食料と代えた。

・南から来る馬帮は、茶葉（沱茶）を持っていた。

・両親や夫を早く亡くして、生活が苦しかった。

・バターは貴重だったので、バター茶を飲むときはお椀の中に少しのバターを入れて、バターをなるべく飲まないように表面を吹いて、次の茶を足した。お茶も薄いものだった。

・（今年86歳だが）長寿と健康の秘訣は、幾つになっても働くこと、秘密を作らないこと。働かなくなったら、すぐ病気になる。お酒も1日半斤(250g)くらい飲む。

溜筒江(2150m)

瀾滄江の本流まで下り、次の目的地・溜筒江へ向かう。溜筒江のチベット名はホルリカ。これまで聞いてきた老人の話には、この地名がよく登場した。

溜筒江は、瀾滄江の渡し場である。ここまできると瀾滄江は川幅が数十メートルまで狭まり、流れが急になるので船は使えない。ロープブリッジで渡るのだ。川にロープを一本渡しただけの橋である。ロープに滑車と紐をかけて人や馬がぶら下がり、勢いをつけて対岸まで滑る。昔のロープは竹だった。竹に滑らせるのは滑車ではなく、木の板だった。

溜筒江に暮らす男が、その板を見せてくれた。半円形に湾曲した板が二枚ある。その二枚でロープを挟んで使う。固い木で作られており、ロープと接する内側は使いこまれて光っていた。彼に話を聞いた。

○ルゾン（男、1919 生、藏族）

・ロープブリッジは、1日に600～700回物や人や馬を渡した。

・溜筒江では、ロープブリッジによる収入が大きかったので、赶馬の仕事はしなかった。

・溜筒江付近のメコン川には、以前はロープブ

リッジしかなかったが、1940年頃に、麗江の商家・頼家が橋を架けてくれた。

- ・ 頼家の人は、チベット語を話せた。
- ・ 留筒江には、大きな馬店2つあり、他にも幾つもあった。
- ・ 村には、ホルリンという寺がかつてあった。ケサル王が18ヶ所に兵を置いたという場所の1つ。
- ・ 道は険しいがシュラ峠を越えるほうが、芒康(マルカム)回りよりも近い。

ロープブリッジでは、人やラバが時々落ちて死ぬこともあったという。

留筒江から上流では、古道は瀾滄江の西側についている。車道は東側についているが橋がないので互いに行き来できない。このあたりでは、隣村と行き来するのに、茶馬古道が現役で使われている。

梅里水(2200m)

留筒江を訪ねた日の晩、この調査の最後の目的地である梅里水につく。梅里水のチベット名は、メール・シュという。「メール」とは薬の山という意味だ。梅里雪山の語源となった村である。村の古老に話を聞いた。ひ孫を抱きながら話してくれた。

○ケーゾン・ナワ(男、1926生、藏族)

- ・ 若い頃、馬帮を助ける仕事で、シュラ峠を越えてチベットへ行くことが何度もあった。疲れた馬に変わって、自分の馬を貸した。
- ・ 馬の貸し賃は、(怒江玉曲流域の)ジャロンまで15元、ピドゥー20元、サイー30元/頭。3元でバター1塊買えた。
- ・ 馬帮たちと一緒に、外の世界を歩けることが嬉しかった。
- ・ 盗賊が多かったので、1人1丁のライフルを持った。盗賊は、この辺りの村人だった。
- ・ 大雪が降った後、馬の前に出て、シュラ峠の下り道の雪を掘った。雪目になり、服が寒くて大変だった。雪が深いときは、人が荷を担いだ。馬は、雪の中で草を見つけると毒草でも食べてしまう。1~2頭、死んだ馬を見た。雪の中で骨折する馬もいた。当て木をして治した。
- ・ ピドゥーの辺りに税をとる関所があった。その他の場所でも、役人が気まぐれで税を取っていた。
- ・ 村でもてなしたお礼に、馬帮が茶や紅糖をくれ

ることがあった。

- ・ 解放後の1952年頃には、馬帮の仕事がなくなった。ダライラマを慕ってインドへ行った。11年前に、ここに帰ってきた。

この村では、馬帮の荷を自分たちのラバで運んで、標高四八一五メートルのシュ・ラ峠を越える仕事をしていたのだ。シュ・ラとは梅里雪山の北の峠で、そこを越えるとチベット自治区に入る。

村の上流の古道を見にゆく。泊まった家の主人が案内してくれた。古道は、車道の十メートルほど上に並行してついていた(写真8)。主人が言った。

○ディーチン・イシ(男、1937生、藏族、農業)

- ・ 以前の梅里水村は、山のもっと上の方にあった。
- ・ 梅里水には、簡単な馬店があった。
- ・ 関税を逃れるため、チベットから持ってきた大きな商品は梅里水に置いて、小さい商品(時計など)だけ靴の中などに隠して、徳欽へ運んだ。
- ・ 村付近の道が壊れたときは、村人が修復した。そのお礼に、商家が時々金をくれた。
- ・ 今は道端に棘の生えた灌木が多いが、以前はなかった。
- ・ 人民公社のときに、使われなくなった古道に作物を植えたことがあった。

足元には時折岩が出てくるので、岩を削って道がつけられている。その岩には、ひづめと同じ大きさの窪みが刻まれていた。

古道は、シュ・ラへ向かう谷へいったん降りる。谷の流れは急で、白く泡立った水が流れている。昔は橋があったという大岩で道が途切れた。そこがこの調査の最終地点だった。

この先、古道は標高四〇〇〇メートル級の怒江山脈を越えて、チベットの大峡谷地帯へと続く。

まとめ

雲南省の香格里拉から徳欽まで茶馬古道を踏査して、茶馬交易に関わった人に当時の話を聞いて記録した。また、現在の車道とは違う場所にある古道の位置を明らかにして、実際に足で歩いて現状を記録した。

今後は徳欽以北の茶馬古道の調査を行うが、新中国成立以前の交易に関わった人は既に80歳以上と高齢であることに加え、当時の建物や橋は老朽化が進んでいるため、調査を急がなければなら

ない。

謝辞

本調査は、総合地球環境学研究所プロジェクト「人の生老病死と高所環境—「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」（代表：奥宮清人准教授）の活動の一環として行いました。記して感謝します。

参考文献

- 1) 上田信 2006 『東ユーラシアの生態環境史』山川出版社
- 2) 小林尚礼 2007 雲南一茶と少数民族の道—茶馬古道を辿る. 『Coyote』No.23 スイッチパブリッシング
- 3) 清水康夫 1992 四川省のチベット族を訪ねて.
- 4) 小林尚礼 2006 『梅里雪山 十七人の友を探して』山と溪谷社
- 5) 中村保 2000 横断山脈・雲南西北に消えた能海寛. 『深い浸食の国』山と溪谷社

Summary

Exploration of Ancient Roads in the Eastern Tibet [Part 1] The Ancient Road of Tea and Horses from Shangrila to Deqin

Naoyuki Kobayashi

Kobayashi Photo Office

The author of this paper explored "The ancient road of Tea and Horses" from Shangrila to Deqin in Yunnan of China, and interviewed the people who were concerned with the trade of Tea and Horses, and recorded looking and listening about the road and the trade. He researched the location of the ancient road which is not same as the location of present roadway, and walked the ancient road and recorded the conditions.

The next exploration of the ancient road of Tea and Horses proceeds in the north of Deqin.

The exploration should proceed in the early time, because the people are more than 80 years old who engaged in the trade before founding of People's Republic of China, and houses and bridges in those days are decrepit.